
聖看護天使『患者にエイド』

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖看護天使『患者にエイド』

【Nコード】

N7728E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

事故を起こし、入院していた少年のもとへある看護師がやってくる！？その少年と看護師の邂逅の瞬間。

（前書き）

始まりが非常に痛いですね。いや、いきなり何を言っているんだと思われるかも知れませんが、まあ、読んでみたらわかると思います。あまり連載とか考えていませんが……感想、評価なんかもらえると非常に嬉しいです。え？どのくらい嬉しいかって？そうですねえ、某太鼓のゲームを一曲フルコンボするくらい嬉しいです。それでは、評価感想、どちらかよろしくお願いしたいと思います！

看護聖天使“患者にエイド!”

プロローグ:

先週、俺はバイクで事故ってしまい、右足を折るという人生初の骨折を経験した。骨が折れるとはよく言ったもので、なるほど、確かに折れてしまうと痛いものは痛かった。何を馬鹿なことを……そう言っている人がいるのなら一度、骨を折ってみるがいい。風邪になって初めて健康が一番だと気がつくようなものだ。

両親が早くに金だけ残して事故って死んで、ちよつとばかり事故には気をつけていたつもりだったのだが相手のわき見+飲酒運転で俺は危うく死にそうになったのだがそのときにあんまり見たことのない両親の姿を見た気がして気がついたら俺はこの相部屋にいたということに気がついたのである。

「あゝあ、早くよくななんねえかなあゝ」

確かに昨日、俺はそんなことを言った気がした。それが、間違いだったことを知るのは次の日の朝だった。

第00話

「それは悪魔だった」

「ん…………む」

日差しがあたってきたところをみると朝のようだ。清潔感とつか、無機質な白色の部屋の天井が俺の視界に入ってくるのをらくらくと確認することが出来るのだが……………まだ、俺は眠かった。

「…………ふう」

再び俺は目を閉じてしまったのだが……………

「さあ、朝ですよゝ蒼疾君、おきましようねゝ」

やけに俺を子ども扱いしているような声が聞こえてくる。まあ、

それでも俺は無視して眠っていた。

「ほおら、早くう〜」

ゆすつてくるが、そんなんじゃ俺はおきない。

「ほらほら、早く起きないと〜」

その昔、俺は五個ほど目覚ましをつけてもうつととしていたのだからな……………そんな甘いやり方じゃ……………

こき〜〜〜〜ん

その瞬間、目の前が虹色にスパーク！お星様がぼくちんの目の前に光臨！

「つつ〜〜〜〜〜」

「あは 起きた起きた」

股間を押さえて俺はベッドの上に起きた。目からは涙が流れている。

「おはよう、蒼疾君」

蒼疾の体内

A

「なんだ？まだ未使用の兵器、ジェノサイド・マグナムが起動しなくなつたぞ！？」

B

「敵襲か！？いつもこの時間だったら勝手に起動するはずなのにな

……………」

A

「そのようだな……………ううむ、まさか、的確にここを狙ってくる恐ろしい相手がいるとは……………」

C

「痛み体感システム、レベル10！危険です！」

A

「何？そのような威力だったのか……一体、敵は何が目的だ？」

俺が起き上がった先にいたのは見知らぬ看護師の服を来た女性だった。年齢は俺より上に違いないだろう。

「な、なにするんすか！危うく女になっちまうところでしたよ！」

「あら、大丈夫 私は手加減を知ってるから 手加減してなかったら今頃君のそれ、いつてたよ」

まあ、朝っぱらからなんて危険な発言さましょ！？

「くあ、いてえ……………」

俺がそういつと看護師はさすがにやりすぎたと思ったのか急に心配そうな顔になって俺の押さえているところを覗き込むようにしてきた。

「大丈夫？さすつてあげようか？」

「ひ、ひやあつ…………い、いや、結構です」

「そんな遠慮しなくても……………」

彼女が右手に何かを隠すのが見えたのだが、それが実は金槌だった。俺のジェノサイド・マグナムよ…………よくぞ金槌の一撃を耐えたものだ…………その勇姿は賞賛に値するに違いない。

「も、もう大丈夫ですっ！」

「え？本当に？本当に大丈夫かどうかみてあげるわ」

そういつてマジでパジャマをずりさげようとしてくる看護師に俺はマジであせった。こ、これは確かに嬉しいんだが…………いやいや、そんなことが出来るはずがない！

「や、やめてくれえ……………」

「ほら、動かない！」

だが、いかんせん見た目はひ弱な女性なのに相手のほうが力があつた。瞬く間に俺は下半身がパンツだけとなつてしま……………

「ちよっと！マジでやめて！それ以上はやばいつて！モザイクかかる！モザはいつてR指定必須になるって！」

「こらこら、暴れちゃ駄目だつて！ほら、もうちよっとで確かめて

あげられるからねえ」……………」

ふざけてやっているのかと思えば、その瞳はとても真剣だったりする。お、恐ろしい人物だ。ここまで真剣にやっているのなら抵抗するのやめちゃおっかなあ〜と思えてくる自分が悲しかった。

だが、半ば沈没しかかっていた……………いや、既に氷山にぶつかって船のさきつちよしか出ていない状態で近くを漁船が通りかかってくれたようだ。

「おや、吉田君の健康報告が遅いと思ってたら君が来てましたか」
長身に白衣で眼鏡をかけた冷静そうな人が入ってきた。

「せ、先生！助けてください！」

俺はその人に助けを求めた。

「ふむ、やはりこうだった状況に陥っていたか……………ルム・ハーベン、彼は大丈夫だからこっちに来てくれ」

「へ？わ、わかりました」

そういつて謎の看護師は僕から離れると先生の隣にたった。

「い、一体全体その看護師さんは何ですか！？朝から金槌で叩かれるわ、パンツを脱がされそうになるわ……………」

既にパジャマの下はどこかに飛んでいつてしまっているし、何故か上のほうもすべてボタンがはずされていたりする。

俺の言ったことを聞いて先生は「ああ、そういえば紹介がまだだったな」とか呟いて隣の看護師を前に出す。

「……………この子の名前はルム・ハーベン。今日から君に専属でついた看護師だ。以後、よろしくやってくれたまえ」

「よろしく願います」

「にや、にやに〜！？」

俺はそんなばなな……………いやいや、そんな馬鹿な！？と思ひながら茫然としてみるとさらに先生は続けた。無表情が逆に恐かった。
「昨日、ここの廊下を通っていたらはいやくよくなりたいな〜と言っている君の声が聞こえてきたからな……………実のところ深夜から君の部屋にはルム・ハーベンがずっといたのだよ。先ほどもいったと

おり、君に二十四時間、ずっとついているから安心したまえ」

なぜだろう？先生が何故か俺に死刑宣告をしているような気がする。

「……………」

言葉を失っている俺にさらに先生は続ける。

「ああ、別に彼女を専属で着けたからと言って入院料が上がるということはないから安心した前。どうせ、貧乏人……………げふんげふん……………君のような好青年は色々と大変だろうからな……………それに、

我々としても厄介払い……………げふんげふん……………ルム・ハーベンもやる気を見せてくれているし……………邪魔者が……………げふん……………

…こちらで仕事中に話しかけてくるような輩がいなくなつてせいせいしたよ」

「先生、最後のほうは本音がまる聞こえ声ですよ……………」

「ま、君のお世話は今日からこのルム・ハーベンが面倒を見てくれるつてことだから仲良くしてやつてくれたまえ」

今、心なしか暇つぶしの相手をしてやつてくれて聞こえた気がした。ともかく、俺の股間をいじめる相手のほうに視線をやると彼女は俺の視線に気がついたのか、おもいきり頭を下げて名乗った。
「ルム・ハーベンです！これからよろしくお願いしますね、蒼疾君！」

あつけにとられていた俺だったのだが、彼女の言った言葉に対して慌てて返事をする。

「は、ま、まあ……………よろしくお願いします」

それをみていた先生が俺を見て『ふむ』と頷いたように見えた。

「……………では、朝食を運んできてくれたまえ、ルム・ハーベン。私はここで失礼させてもらおう」

「はいっ！任せてください！」

ルムさんはそういつて去つていったのだが、失礼するとか言つていた医者である先生はここに残つたままだった。そして、わざわざ廊下まで一度出て行き、もう一度はいつてくるというおかしい行動

をした後にこちらに近づいてきて、耳元でしゃべった。

「……………吉田君、今日から君は個室だよ」

「え？何ですか？」

「まあ、病院側の意見というか、そういうものがあるんだ。それと、今後、君が怪我などをした場合この病院に来れば無料で診察しよう」
俺はそれを聞いて当然のように驚いた。

「え？なぜですか？」

「まあ、それは……………」

その先を言おうとするとルムさんがおぼんを持って戻ってきたのだった。既におぼんにはおかゆのようなご飯と具の少ない味噌汁とかがこぼれていたりする。

「……………また今度、このことについては話そう」

ルムさんが入ってくるや否や、先生はそついうと出て行ってしまった。

「さ、朝食の時間ですよ　お口をあぐん！してくださいねっ」
そついつてレンゲで俺の口におかゆのようなご飯を食べさせようとするが…………

「大丈夫ですって！自分で食べれます」

「いいです！私が食べさせますって！」

そんなやり取りを数回した後……………急に彼女は動きを止めた。

「……………ここ、4階でしたよね？」

「？……………ええ、まあ」

「そうですか……………ご飯を食べてくれないのなら……………」

おもむろに窓から飛び降りようとしたのだ！慌てて俺はそれを止める。

「ちょっとまってくださいって！何で飛び降りようとしてるんですか！」

「大丈夫です！私には翼が生えてます！！」

確実におかしいことを言いながら飛び降りようとしているので俺は彼女を止めようとしたが、彼女の力は強く、難なく俺を突き飛ば

した。

「がはっ！！」

背中が備え付けのテレビにあたり、テレビが何故かしりもちをついた俺の右腕をつぶした。

「ぐあああああああ！！」

叫んだ瞬間、飛び降りたはずの彼女が窓のふちに立っていた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「！？」

彼女の背中には光り輝く何かがあった。痛みも忘れてそれをみていると、彼女が病室の中に入ってくる。その瞬間、あの光は消えて慌てた顔のルムが顔を覗き込んでくる。

「す、すみませんっ！！」

「え？」

折れた俺の右腕を掴んで彼女は詫びた。

「私の我儘のせいで利き腕を折ってしまったって……………何といたらいいか……………」

確かに折れた根本的な原因は彼女にあるのだが、彼女の飛び降りを阻止できただけでよかったと考えたほうがいいかもしれない。

「気にしないでいいって……………ちよつと痛いが、まあ、先生がそういえば治療代はタダにしてやるって言ってたし……………」

そのことを言うと彼女は驚いたような表情をした。

「そ、そうなんですか！？ですが……………」

「ま、ルムさんがいるから支障はないだろうから世話のほうはよろしくお願いするって！この通り、右腕折れちゃってるからね。ああ、まだ朝食あるから食べさせて欲しい」

俺はそういつてナースコールを押した。ナースコールを押したのだが、先ほどの先生が姿を現した。

「ふむ、早速か……………とりあえず、こちらに来たまえ。ああ、ルムはここで待機、わかったかね？」

「は、はいっ！！」

治療をしている間、先生は俺に聞いてきた。

「別に彼女に世話をしてもらわなくてもいいだろうに」
すべてを知っているといわんばかりに先生は言った。

「あは、知ってました？俺が左利きってことを……………」

「まあね」

「けど、なんでルムさんをここに呼ばなかったんですか？」

周りには誰もおらず、看護師さんをまだ見ていない。

「ま、こつちにも色々と事情があつてね……………それに、ルムが出来ることといえば絆創膏をへたくそに張ることぐらいさ」

「……………」

そんなことで看護師をやっていけるのだろうか？

「血を見れば倒れ、注射の先端を見れば倒れ……………まあ、天然が入ってるんだよ」

本当だろうか？それだけではない気がする。

「とりあえず、処置は完了したよ。さ、ルム・ハーベンのところに戻って朝食を“あゝん”してもらうことだね」

「……………はあ、わかりました」

「ああ、そういえば、もう部屋が変わってると思うから……………」

先生は個室の番号を書いて俺に渡して手を振った。

「健闘を祈ってるよ」

「……………」

誰と戦えといっているのだろうか？

「本当に申し訳ありませんでした！」

ルムさんは膝に頭がつくぐらいまで頭を下げていた。

「そ、そんなに頭を下げなくても……………ほら、はやく朝食を食べさせてください」

「わ、わかりました！」

ベッドに座り、俺は母親にもされたことがないだろう人生初の“

あゝん”をしてもらおうとしたのだが……

「うぐっ!？」

「す、すみません!!」

レンゲがのどにぶつかり、嗚咽感がしたりもした。そのなれない手つきに心配に名って聞いてみると、彼女はこういうことをするのは初めてのようだ。

朝食をもどしそうなりながらも俺は完食しきった。

「ふう……………」

ちょこつとしか実際のところは食べることが出来なかったのだが、まあ、それはしょうがない。

「いかがでした？」

「ん?おいしかった」

「そうですか、それはよかった……………」

そういつて彼女はおぼんを片付けた。

「あの、ちよつと質問していいですか、ルムさん」

「なんですか？」

近くのパイプ椅子に腰掛け、彼女はどこからかりんごを取り出すとそれをむき出した。

「えつとですね……………」

「あいたつ!!」

みるとナイフで指を怪我していた。俺は慌てて近くのティッシュを掴んで血を押さえることにした。

「す、すいません、蒼疾君」

「いえ、困ったときはお互いさまつ……………」

左手だけで押さえておき、とりあえず絆創膏を取り出して彼女につけてあげた。

「……………」

彼女はそれを何故か大事そうに抱きしめていた。

「?」

俺の不思議そうな視線に気がついたのか、ルムさんは照れたよう

な顔をしていった。

「い、いやあ……………こんな風に絆創膏をされると嬉しいですよね？」
「え？何故？」

「自分を支えてくれる人がいるんだなあって思えるんです。たかだか絆創膏、一枚ですけどね。でも、それはとても大切なことだって私は思えるんですよ。母がよく怪我していた私に絆創膏をしてくれました。そのとき、嬉しかった……………私、どんなことも苦手ですけど、絆創膏だけはうまくはれるように何日も何日もがんばって練習したんですよ？今じゃ一番うまく貼れると思います 蒼疾君はどう思います？」

どことなく子供じみていたそれまでの行動と裏腹に、素直にこの人の心が見えたような気がした。

「そうっすね、たまに俺もそう思えます」

俺はそういつて頷いた。なるほど、だから先生はあんなことを言っていたのかと思う。この人は努力家という言葉では足りない、一瞬一瞬に命がけで一つのことに集中すると周りが見えなくなってしまう……………そういう性格なのだ。

そんなことを考えていた俺の耳にルムさんの声が聞こえてきた。

「……………だから、だから私はどんなことがあっても蒼疾君を早く退院させて見せます！どんなことでもしますから何でも言っして下さいね」

窓から注ぎ込まれる日光が彼女を照らし、その姿が天使に見えた俺は頷いた。

「わかりました！些細なことでも相談させてもらいます！」

「では……………朝ちよつとやりすぎてしまったところを見せてもらいますね」

「へ？」

彼女は俺をベッドに倒すとパジャマを再びとろうとしていた！？

「へ！？ちよつとすとーっぷー！！見なくていいです！」

「だから、大丈夫ですって」

「大丈夫なのは俺です！」

これから先、俺はどういった目にあうのだろうか………そのことだけを考えると俺は不安で不安で仕方がなかった。しかしまあ、この看護師さんがいてくれる限り、俺の病院生活に退屈という二字が出ることはないに違いない！！

（ F i n ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7728e/>

聖看護天使『患者にエイド』

2010年10月8日15時11分発行